銀鈴

第二十八號

明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回廿五日發行）
明治四十一年一月二十日發行

謹みて新年の
御祝詞申述候

銀鈴社編輯局
河野翠瀲
菅原紅雨
河野素陽

戊申元旦

銀鈴

第廿八號

明治四十一年一月二十日發行新春號

れもひ草

月森神來

戀草は涙の雨のつちかひに尺をぬきんじ紅き花しぬ

(一)

星一つ西へ流れぬふる里に病みておはする母

思ふ時
君みれば胸のあら野も花かをり薔薇の色の霞
するかな
いみきらひさてきた見ればなつかしと毒の酒
くむわが習ひかな
さな怖ぢそふる戀人よ死を強ひし炎の思きゐ
せはやなし
やよ少女きて呵(さいな)みねこの罪はざんげに許(ゆ)りず
汝が手にぞ消ゆ
強雨いせ來とふためきて大空を去來すらしも
黒雲の族(むら)
君を戀ふとしもいひゐず相みてはたゞためら
ひとはや百日へぬ

枯木なす心の森も春の風ふけば花しぬ薔薇の
色に
想ひ見るわが來しかたは灰色のあら野なりけ
り涙とむらへ

誌友消息◎增野翅白は早稻田大學に入學して研學に余念なく◎森脇桃村後藤藤郎三明千鳥小川石櫻藤本曉花の諸氏は故郷にて新春を迎へ詩想ます圓熟せり◎月森神來は長詩に於て其技を發揮し、松陽山陰兩紙に縱横の才を揮ひ◎本社紅雨は新春に入りて氣いよ〳〵擧がり千丈の氣を吐いて斗酒を辭せず◎翠激は客冬より多忙を極め殆んど暖まらず◎其他の社友また得意の作物を寄せて健在なり

みとりの夜

藤　朗

『御母さんそんな弱い事をおつしやらないでね、今日も御醫者樣が明日からは良くなるからつて云はれましたのですから。』涙にうるんだ眼を見せてはと顔をそむけて枕許にすりよつて見ると、はや母はスヤ〳〵と眠つて居られるやうである。

心強くは云ふて見たものの、天にも地にもたつた一人の、たて換の無い母上、病氣と云つたら風邪一つ引いた事もないと云ふ、氣丈な母上が、まァ何といふ衰へやう！

何度さし上げたかわからない藥も、只空瓶ばかり增すのみで、自分はほと〳〵困じ果てたのである。見舞に來て呉れた里の人々も、一人へり二人へり、跡には隣の平作翁と、私と妹との三人きりである。妹は無心に眠つて居る。

人いきれで暖くなつた室に、新らしい空氣を入れやうとソツト起きて椽側へ出た。何時降り出したのであらう、つゆ雨がしと〳〵と庭の桐の若葉を打つて居る。

遠く見ゆる鎭守の杜の間に、村の居酒屋の白壁がぽーつとほの白く浮かんで居る。もう何時であらう、昨日時計が止まつてからかまつ

てない。何げなしに目をそらして、煤で黒く汚れてる屋根裏を見る、螢が一匹そこに青白い弱い光を放つてしきりともがいて居るやうだ、障子をもれるはの光りで、蜘蛛の網がありのがやつとわかつた。自分は目を見張つて氣をつけて居ると、螢はやうやくにして飛んで行つたが、また別の網に掛つたらしい、今度は身動もあせりもしない、彼はもうあせつて見る元氣がないのだらう。螢はとう〳〵惡魔の手に落ちてしまつたのだと思ふと、何んだか自分の運命も恰度この通りに支配されるのではあるまいかと思はれるのを、自分の身に引きくらべて見ると、云ふに云はれぬさび

しさを覺えて悚然とした。

寒い風がザーッと吹いて來る。それにつれて沖の土手道を通る馬子のひな歌がひびいて來る。

「――――

跡は野となれ山となれ――」

自分は思はずゾッとした。

急に母の事が氣になつて來たので、内に這入つて見ると、母は以前のやうにスヤ〳〵と眠つて居られる。

ランプの火の油がつきたのであらう、スースーと音をたてゝ居るのが恰度人の臨終の息でも引き取るかのやうに思はれる。どこやらで

鷄が鳴いた。

妹はまだ他愛もなく、いびきをかいて居るのである。

(完)

○　思はれ人

黄金の光りのなかに白珊瑚あまた懸れり雪の曙

いと清き心の玉座みそなはせ瑯玕づくり雪の大宮

春の風なよらに吹く日もろ〳〵の草の芽生ひぬさても嬉しき

冬の夜

紅雨生

これといつて尻に火のついた程の忙しい要事はなし、誰一人話し相手があるのではなし、それに今夜は近來ぶりの寒さではあるし『ねゝまゝよ寢るに如かず』と、獨身者の氣樂さ誰に遠慮も氣兼も相談も要らん。押入から蒲團と枕とを引つ張り出し、洋燈を消して仰向けになつた。眠れない。また強ひて眠らうともしない。胸に手を當てゝ死んだ眞似をして居ると、今日一日のあれやこれ、明日の課業のこと、昨日のこと一昨日のこと、それから故郷のことと種々な幻想が恰度活動寫眞でも

見るやうに轉々頭の中に浮かんで來る。急に炬燵の中でガタ〳〵と音がする。はつと氣がつけば、宿のお婆さんが今炭を注ぎに來たのだ。默つて眠つた風をして居る。その中に婆さんは去つた。何んとなく以前よりか寒い、何處からか風がすいすい這入つて來る樣子だ。『はて變だな』と、むつくり起きあがつて見れば、これはしたり、お婆さんが襖を締め切るとき以前に明けた襖と反對の分を引つ張て居る。『これでは寒い道理だ』と音のしないやうに締めて心の中で笑ひながら床に這入つた。炬燵に足を差し込むとチカッとあつい。アレッと思ふ間にチカチカ〳〵ッと二つ三つ續

けさまに火の粉が飛びかゝる。起きて見るも面倒だ。その中にはをさまるであらうと考へて足を引く。平家物語の『海道下り』を暗誦する。燐寸を摺つて煙草を三服吸ふ。一寸時計を見るともう十一時に間がない。蒲團を被いて眠らうとする息が詰るやうな。首を出す。顏が寒い。また被る。今夜はなぜこんなに眠れないか知らん。もう寢んけりやいかん。また今朝のやうに八時半頃までも寢るときまりがわるい。きまりが惡い許りでなく忙しくて仕樣がない。眠やうとつとめる。眠られん。鼠が天井でゴトン〳〵と音をさせる。家の猫も權力がないなと思ふ。眼はます〳〵冴ゑて

迚も駄目だ。起きて洋燈をつけた。併し何をせうといふ考もない。腹這になつて、睨と洋燈を見つめて居る。「何ぞ御要事があるんですか、この眞夜中に俄かにおよびなさつて！」と洋燈が不平を鳴らして居るやうに見える。半紙を一枚のべて筆を執つた。何を書かうと煩ふ。水の音が物淋しくきこえる。爺さんの鼾の聲がうなるやうにかすかにひゞく。その他は森として居る。今時かうして起きてこんな下らんことをして居るものはこの〇〇村でも僕一人のやうな氣がして急にこう物淋しい感がする。椽の天井の上で何やらカチッと音がする身体がじん〳〵とする。便所に行きたくなつた。そつと雨戸を明けるのも何んだか妙だ。といつて遠慮なく明けては老人たちの夢をさまし恐がある。どう〳〵恐いものでも見るやうにそーつと明けた。風もない、明らかな、まことによい夜だ。庭の松が地上に美しく影をうつして居る。ついそこまでも散歩して見たらと思ふ、寒いからよしにした。用を濟ませて歸る。こんどは眠れるであらういつ迄起きてゐてもしかたがない、と灯を消した。仰向けになつた。からつからつと下駄の音がする。誰だらうこの夜更けに、しかも氣のせいか女のあるき振りだ。ちよつと起きて見たいような氣がせんでもない。さつき散

歩を思ひとまらねはよかつたと思ふ。急に煙草を吸ひつけて煙管で火鉢を二つ三つ續けさまに強く叩いた。何んのためにこんなことをしたのか僕にもわからん。思ひ切つて眼を閉ぢた。枕元の時計の心細げに秒をきざむ音が耳に入る。水の音はしきりに夢をさそふ。

——完——

江白遙聞風

玉利星夢

わが胸のなかにしてさく火の花をわれ今おぼゆやがて死ぬらし

わだつみの底つ岩根に我ひとり座して思はむ愚かなる身は

白き紅きいづれもよしと秋の花咲けるをめでゝ君とを行きぬ

河にそひ菊咲く小徑おもかげに君こそ見もれ月のぼるとき

明賀溪南

大空に初日はのぼる南天の實のたを〳〵と紫

垣による　後藤藤朗

冬の街豚の肉賣る軒にたちかたゐの兒等は風車する

秋死にし虫が忍びの泣く聲と霜夜の角を寢る床に聽く

今いづこ時といふなる大力の手中に絶ゑず我母を泣く（我母を忍びて歌へる）

魔の手に似、黒髪落ちて物泣きぬ地獄を行くとすさまじき街

立石洲洋

初雪や雲こそ晴れし富士の峰光明にたち夜明けぬるかな

菅原紅雨

寂寥のとらはれ人とわれ在りぬ落葉そよめく木枯の暮

霜枯れし葉末に結ぶ白露に朝風するをあわれとぞ見る

暗澹のともしびじじと音たてぬ何嘆くやとさゝやぐごとも

瑠璃色の天をあやぞる森林の靜けさに似るわが心かな

薄紅の花びらにしも忘れゐず君がなさけの口づけの香を

森脇桃村

なほわれはぞよめく街の人衆の中にまぢりて

君影趁ふ
駒なめて皷といろと大軍の今しも來たる海あるゝ日は
枯れ果てし秋の大野かかりそめにだに微草の
萌芽する得ず
野に行けば百千の鳥は殘忍の言もてなほもわ
れをさいなむ
わと呻び木の葉篩ひぬ森林は大き世界の呼吸
のごとく

朝日山錦水

み空よりあらたま姫は花やかに若きすがたを
とゝのへて來し

漫言

素陽生

新年になつて過ぎ去つた一年間を追想して、更らに將來の希望を述べるのが、陳腐である、舊弊である、平凡であると口ぎたなく罵られるお方があるが、自分は又これ程價値あり、有益な事はあるまいと信ずる。ちと古くさいが支那人の三省も決してつまらぬ事でないのみならず、慥かにこの世に必要な道具である、然らば穴がち新年に省り見ることのそれが無駄骨には終るまいではないか。僕はこの見地からして、こゝにおこがましくも筆を取つて見るのである。が併し最初に斷はつて置かねばならぬことは。僕が決して作者でない

といふ事である、市井の俗事に狂奔して居る人の子である僕は文藝を最も樂しい唯一の慰藉物として居るのだ、つまり僕は讀者といふ側からの注文や思ひ付きを書いて見やう、勿論評論や批評なんてそんな大袈裟なものではない。

まづざつと見渡した所で、短歌が一番賑やかである、が譯文や俳句はまことにさびしい、で今年からは一層寂寥な欄に力がいれて貰ひたい。一月の新年號は余程花やかで見ごたへがするやうだが、僕は僕の性質として九月以後の小さい可憐な分を愛するのである。

表紙はいづれも實に情けないものであつた。

小說美文、多田東岳先生の「わが記」は新年號を飾つた美文であるが、高山博士かぶれの所が多いのには閉口、但し淸新。中村とく子女史の「末乾袖」中村秋泉君の「さらばよ古里」ともにイヤミたつぷりな文だ。僕は好きぬ。紅雨君の「つきぬ涙」いやはやどうも恐れ入つた代物である、余体……的の文ぐらゐ癪に障るものはない、あれで折角の構想をめちやくちやにして仕舞ふ。僕は君が短歌にはあらゆる賞讃の辭を惜まぬが。美文や小說では御世辭にもほめられぬ。よしあき君の「春雨日記」月光君の「旅日記」蓮の浮葉君の「哀音」翠瀲の「長恨記」などは面白く讀んだ作物であつた。

最後に僕は高城七星氏の『報酬』を昨年本誌の白眉と斷言する。脚氣で入院して居た所が、意外な所で許嫁の娘の不義を知つて、水彩畫の巧みな、候といふ字に特徴のある愛らしい芳江と海水浴場で手を取る約束が成立したのだ、この約束は『よも道子は知るまい。これをしも當然の報酬といふべきであらう』と筆が止めてある。にくいほどの出來で、慥かに昨年地方文壇の一傑作たるを失はぬと信ずる。他の凡ての作物を犠牲にしても、この一扁は永久に保存したいものである。

――以下次號――

雜吟

冬の月 森閑として犬吠ゆる　藤朗

天平の廢寺の跡や梅の花

雛僧の經習ふ夜やあけがたき

初鷄や四隣の礎打ち止まず　雨翠

初日影 長興富士の頂きに

東門は既に夜明けて初鴉

高麗人も日語交りに御慶哉

松の内ある日は船に遊びけり

太箸や朝鮮に來て三つの兒

妻も無事子も無事も我無事の春

『惠みの露』を讀む

翠　瀲　生

飯塚正一氏作『惠みの露』は、昨夏、東宮殿下の山陰道に臨させ給ひし紀念として、兒童に適するやう物せし一篇の唱歌なり。著者一冊を寄せて批評を需む、固より零碎なる這箇一小篇の、氏が創作力を上下すべき作物なりとは覺ゆざれども、推敲の來た完からざるものあるは、余の甚だ遺憾とせし所なり。

四句一節、十五節に渉る七五調のうち、この、その等の代名詞を用ゐること屢々なりしは、作者が技巧の才に乏しきことを表明するものにあらざるなきやを疑はしめたり。第四節の「咽ぶ」は涙に咽ぶものなるべけれど、單に咽ぶとのみにては無理ならじか、第六節「海戰の昔」も一見頗ぶる妙ならず、蓋し再考の餘地あらむ。

以上、作者が寛容に甘へて、聊さか批議を加へたり、併しながら全体に、辭句を遣る流麗摯實なりしは、作者のために喜ぶ所也、妄評死罪。

縫　手

河野翠瀲

白玉の柔く滑らか
時じくに熱き血ぞ湧く。
薔薇の香、ほのぼの吐息
脈搏のかすかなる音。

ああ君が両の纖手よ
誰をかも捕へむとする。

こゝろ今千たび迷へり、
香はしく將や眞白き
君が手の晴々しさに。

▲寄贈新刊　△藻の花（四の七）（四の八）△山鳩（四　五）△ウキジロ（五の一）△涙花（三の七）△明ボノ△三餘の友△俳句と川柳△朝紅△（三の十二）△葦附（一の十）

▲社告　▲新年匆々意外の遲刊、實に申譯がない、全く編輯員多忙のため心ならずも、一日々々と延びた譯だから、十分御酌量下すつて、お咎め下さらぬやうお願ひする△次號は必らず二月二十五日に發行致します△最近入社せるは三宅憲治山根實太郎の二氏である

▲社友募集　六ヶ月誌代貳拾五錢前納者は社友として待遇する、一般讀者は成るべく社友と成られたい。

▲次號原稿　〆切は二月十日

銀鈴　三冊郵稅共拾參錢六冊仝前金貳拾五錢
廣告料　一行拾錢　一頁壹圓　半頁前金六拾錢

明治四十一年一月十七日印刷
明治四十一年一月二十日發行　（銀鈴廿八號）

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三一
發行兼編輯人　河野岩雄

島根縣飯石郡赤名村大字赤名八二一
印刷人　木村柳三郎
印刷所　赤名活版所

發行所　石見國邑智郡田所村　銀鈴社

明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回廿五日發行）
明治四十一年一月二十日發行